

## 絵画と小説： 見ることと読むこと

高橋 順子



5. FERDINAND: *Justice and Divine Vengeance Pursuing Crime*, 1808. 95" x 115". Louvre.

完成された絵画を目の当りに見れば、自らその物語性が一瞬にして視覚を通して伝えられてくる。一方、小説は、読みはじめたばかりでは何も分かってはこない。一頁ずつ読み進んで、最後の一文を読み終ってはじめて、その物語全体がみえてくるのである。見ること、見てとること。読むこと、読みとること。物語を視覚を通して伝えられること。物語を文字という媒

体を通して主観の働きの中に、個人の頭の中に images を創りあげてゆくこと。この二つは、その手段は異なっているけれども、“解釈する”という視点において、かなりの共通性を持っていると思われる。小説は、その始まりから終りまでを文字によって細かに書き綴り、絵画は、ある物語のあるひとつの場面を描いてみせる。絵画を見るものは、その場面からその物語の前後を想像することができる。小説を読むものは、その文字からそれぞれの場面、または登場人物の姿などを想像しながら読み進んでゆく。

ここに一枚の絵がある。1808年、Prud'hon の作で、*Justice and Divine Vengeance Pursuing Crime* という題がついている。<sup>(1)</sup> 作風は neo-classicism の様式をとっている。この絵は大きく分けて、三つの部分から成り立っている。山の中の道端になすすべもなく横たわる裸の男性の死体、まさに走り出さんとしている男。その男は両腕に死体から剥ぎとったらしい衣服などをかかえている。この二人の人物の頭上に空を翔る二人の女神が描かれている。ひとは片手に松明を持ち、もう一方の手で逃げてゆく男を指さして、もうひとりの女神に教えようとしている。そのもうひとりの女神は男装で、戦士のようなヘルメットをかぶり、鎧を着けて、いく本かの剣を握っている。地上も上空も風が強いらしく、逃げてゆく男の頭髪や服の裾も強風に煽られている。女神たちの髪も、裾の長い衣服もケープも大きく波打って、まるで布が流されてゆくような姿になっている。

この絵は、細部の違いは多々あるにせよ、Flannery O'Connor の短編小説 *The Life You Save May Be Your Own* の構成を彷彿とさせる要素を含んでいるように思われる。すなわち、悲しそうな、しかし安らかな顔をして倒れている裸体の男は、まったくの innocence の象徴のようである最後の場面の Lucynell を思わせ、光に顔を背けて、罪の意識に追われるように逃げてゆく男は、自分の弱体さを承知しながら、嘘や作り話で世の中を渡ってゆこうとする、そしてそのための手段として、人々を犠

牲にし、その罪の意識に忍えるために、または必死にその意識から逃れようと、さらに作り話を重ねてゆく男、Shiftlet を連想させ、その逃走しようとする男を捕えんと、上空をおおうばかりに迫ってくる女神たち (Justice と Divine) の力強さは、小説の last scene で Mobile に脱出しようとする Shiftlet の背後から襲いかかる大きな蕪のような形をした雲を供う嵐を連想させる。<sup>(2)</sup>

絵でも小説でも heavenly punishment が“下った”という表現はない。相方共、その直前で終わっている。しかし確実にそれが“下るであろう”ことを暗示しながら終わっている。絵では、Justice と Divine が罰せられるべき人物を発見して、「ホラ、あそこに……」とでも言っているような仕草で止まっている。または、その瞬間を描いている。物語では、嵐が、貧しい未亡人から唯一の財産で、唯一の外界との交流手段であった車を奪い、白痴の娘を見知らぬ場所に置き去りにしてきた Shiftlet を今まさに呑み込もうと迫ってきているところで終わっている。絵を見るものは、その迫剥が次の瞬間では神の裁きを受けることを疑わないであろうし、物語の読者は、まもなく確実にあの嵐が Shiftlet を盗んだ車ごと呑み込んで破壊させることになるだろうと思わされる。

この絵とこの物語を比較しようとする意図は、その構成において相方の物語性が著しく相似する点が認められることを基調に、その絵画とその小説の構成を比較し、絵画と文学のそれぞれの領域について論ずることにある。

絵画においては、その手法から triangular form は固定されている。すなわち、頭上に（頂点に）Justice と Divine を置き、その左下に山賊、右下に犠牲者を配している。一方、小説においてはさまざまな triangular form が想定される。それは、三人の登場人物自体が相互に折りなす form

がいくつか考えられるからである。その三人も思考の設定によって三様の triangular form が可能になる。Mrs. Crater を頂点として、彼女が Shiftlet を娘の Lucynell と結婚させ、自分の農場で働くよう支配しようとした形。Shiftlet を頂点におき、彼が二人の女性を支配しようとした形。さらに、Lucynell を頂点とし、この場合は、彼女を純粋性の象徴とし、他の二人が彼女を頂点に置きながら、彼女を犠牲にした事実を象徴する triangular form が形成される。また、車をめぐっての Shiftlet と Mrs. Crater の駆け引きの形も成立する。Shiftlet はどうしても Mrs. Crater の車がほしかった。彼は彼女の農場にやってきた当初から、Mrs. Crater の家には泊らず、このオンボロ車、15年前に彼女の夫が亡くなって以来動かしたこともない、錆びついた車の中で寝起きしていた。そして彼はたいへんな忍耐と努力で、この車を修理して再び使えるようにした。これを彼は彼の自由への出発の道具として使おうとした。Mrs. Crater は Shiftlet のその企みに気がつかなかった。彼女は自分の娘をこの寂れた農場に男の働き手を獲得するための bait として利用し、車の修理費をしぶしぶ出したながらも、その車を Shiftlet と娘を結婚させるための道具として利用したつもりであった。彼女は、こうすることが自分と娘の幸せのためであると信じ、これが自分達親子の破壊へ繋がるものであるとは分らなかった。彼女の最大限の努力の結実は、なけなしの現金をはたいて修理した車は Shiftlet に盗られ、娘は遠い見知らぬ場所に置き去りにされ、自分はたったひとり、訪れる人もない、侘しい農場にとり残されるということであった。

このように、この物語にはいくつもの triangular form が構成され得るが、ここでは絵画の主題と同じ要素を、すなわち、heavenly punishment をとりあげることとし、したがって小説における triangular form は、頂点に last scene で Shiftlet の背後から迫りくる嵐を置き、その左下に悪人としての Shiftlet を、その右下にその犠牲者としての Lucynell

を想定することとする。

絵画においては、Justice Divine は画面の中央に全体の約半分のスペースを領して描かれているが、おそらく実際には、人間の目には、そしてこの山賊にも見えない存在であって、その代りに、画面全体を吹きぬける強い風が、何かを、何かの異変が起ころうとしているのかもしれないという可能性を、そしてその恐怖感を表わしている。その強風は画面の左手から強く吹きつけ、足早に逃亡しようとする山賊の正面から吹きつけており、彼の着衣は、その強さにひきちぎられんばかりに後方へ吹き流されているし、Justice と Divine の裳裾も大きく波打つように空高く舞い上っている。右手の木々も倒れそうなほど、葉裏を白く出してしまっている。この風が heavenly punishment の prelude として扱われているようにみえてくる。そして、その止めは、天空にある Justice と Divine の動作の瞬間である。先に行く女神が松明をかざし、後方にいるもう一人の女神をふり返って、山賊の居場所を告げている。後方の女神は数本の剣を両手に持ち、右手に握りしめた一本を、まさにその男に向けて打ち振り下さんとしている。風は、異変の暗示だけでなく、動作の持続性を表現することにも効果を上げている。瞬間のそれぞれの動作が、次の場面に続いてゆくであろう可能性を示唆する効果をあげている。

身ぐるみをはがされ、その上殺害された victim は、静かに裸体のまま岩の上に弓なりになって横たわっている。両手を力なく広げ、組まれた足、そして光がその裸体を美しいほど白く浮び上らせるように当てられている。これはキリストの磔刑を連想させる。victim の男はやさしそうな顔立をして、その体は白く、手足は長いがやや細身で弱々しそうに見える。故に、この山賊に襲われてもほとんど抵抗することもなく殺害されてしまったであろうと想像させる。その弱さは、ここでは無垢なもの(innocence)の象徴として強調されている。一方、Lucynell の“弱さ”は、この絵の

中の victim ほど単純ではない。彼女の弱さは知恵遅れであること、言葉を全くしゃべれないこと、そして自分以外の人間に利用されても、それを全く理解できなかったところにある。しかし、神は彼女に常人の及ばぬ宝を与えていた。それは彼女の美しさである。

*She had long pink-gold hair and eyes as blue as a peacock's neck. (p. 146)*

旅の疲れから、安レストランのカウンターにつっ伏して、いびきをかきながら眠りこけてしまった Lucynell を見て、彼女が知恵遅れであることを知らないそのウェーターに、

*She looks like an angel of Gawd. (p. 154)*

と言わせる innocent 故の美しさがあった。

その innocence とは全く対照的に、山賊は奪ったものを両手にしっかりと抱え、強風に逆って逃走しようとしている。彼の顔は前方からの光りを避けて暗い。この暗さが victim の白さと対照的である。前方には光がある。前方からは光がさしてきている。前方には光輝く世界が待っているのかもしれない。しかしこの男は、それに顔を背けている。彼がその世界に向うことを拒絶しているのではなく、おそらく彼の罪の意識がそうさせているのではないか。そして彼はその世界へ到達する前に、背後に迫っている Justice と Divine の punishment を受けなければならない。かくして光輝く世界は、永遠に彼のものではなくなってしまうのであろう。

また、追い迫る嵐から逃げきって、もし、Shiftlet が無事に Mobile へ到達したとしても、彼に何が待っていたのであろうか。車はもともとひどいボロ車であったから、もうそれ以上使いものにならないだろうし、Mobile という都会の複雑な社会の狭間にもぐり込んで、また詐欺師を続けてゆくのか。彼は一方では過去を捨てきれない弱い人間でもある。彼の

独白<sup>(3)</sup>の中にあるように、自分の母親への永遠のノスタルジア、憧憬をひきずり続け、自分が不幸にした者への罪の意識に脅かされる。悪事を働いても彼は、その罪悪感からいつも解き放たれることのできない男である。そんな男が、いくどもいくども人を騙し、罪の意識に悩むという行為をくり返したとしたら、絵画にあるような heavenly punishment を待つまでもなく、彼自身が着実に自己破壊へ進んでゆくことになるのではないか。少くとも、この嵐と、この車と、ヒッチハイクの少年と、見知らぬ町に置き去りにした Lucynell と、彼といつも駆け引きをしようとして負けたその母親との経験と記憶は、悪人になりきれない悪人 Shiftlet にとって、彼の再起を不能にさせるのに十分な要素だったのではなかったか。

確かに重荷ではあったが、実際には罪のない Lucynell を置き去りにしてから、Shiftlet は後悔しはじめている。悪事を働き続けようとする者は後悔したり、罪の意識をもったりすることは許されない。なぜなら、そういうものをいちいち引きずってゆけば、しまいにはその重さで自分が破滅することになるからである。しかし、Shiftlet は後悔しはじめている。事実上は妻となった Lucynell を、ただの hitch-hiker だと言って見知らぬ町の安レストランに置き去りにした直後から、彼の depression は始まった。

He was more depressed than ever as he drove on by himself.  
(p. 155)

彼は本物の hitch-hiker を拾う。その少年に対して、彼は勝手に自分の母親の話をはじめ。そして次第にその imagery は Lucynell に近づいてゆく。

My mother was a angel of Gawd, ..... (p. 156)

この“a angel of Gawd”は Lucynell を置き去りにした安レストランのウェーターが、彼女を指して使った表現である。

He took her from heaven and given to me and I left *her*.  
(p. 156)

この *her* はもうこの時、おそらく Lucynell の imagery と完全に overlap している。そして

His eyes were instantly clouded over with a mist of tears.  
(p. 156)

となり、彼の後悔の念は増々深まってくる。hitch-hiker の少年は、Shiftlet の偽善的な態度に忍えきれなくなって車から飛び出してしまふ。Shiftlet はショックのあまり、100 フィートほどドアが開いたまま走りつづける。実際に何が彼にとってそれほどのショックであったのだろうか。Lucynell を捨てた罪の償いに拾った hitch-hiker に逃げられたからだろうか。おそらくはその hitch-hiker に逃げられたことによって、彼の偽善を彼自身痛く思い知らされたからではないか。もう彼は、偽善さえ行うことができなくなってしまった。あとは、heavenly punishment を受けることのみが彼に残された。Shiftlet はそれから逃れようと必死に車を駆る。しかしその車も

“... the car would go only thirty miles an hour ...” (p. 154)

のポンコツであった。

Shiftlet felt that the rottenness of the world was about to engulf him. (p. 156)

その恐怖に忍えきれずに彼は祈りを上げる。

“Oh Lord! Break forth and wash the slime from this earth!”  
(p. 156)

この “the slime” の中に、彼は自分自身を含めていたかもしれない。そして、彼の祈りのとおりか、またはその祈りに反して、嵐は時を待つことなく、容赦なく、彼の背後に着々と迫ってくる。

The turnip continued slowly to descend. After a few minutes



there was a guffawing peal of thunder from behind and fantastic raindrops, like tin-can tops, crashed over the rear of Mr. Shiftlet's car. (p. 156)

この小説の最後は、

... he raced the galloping shower into Mobile. (p. 156)

となっている。時速30マイルのガタガタ車で彼がこの race に勝てる見込みはない。Mobile に行けば明るい光に満ちた世界が彼を待っていたかもしれない。しかし、Shiftlet もまた、その世界を見ずに終る運命にあるのである。絵画の中のあの山賊にとって、すぐ目の前に光輝く光景があっても、それはもう彼が永遠に進むことのできない世界であったのと同じように。そして、その運命は、彼ら自身が招いたものであった。

絵画は、一枚のキャンバスの上に描かれた two dimensional の空間である。それを見る人々は、その絵の前に立ってさまざまなことを感じ、思い、考え、想像しながら、その絵から伝わってくるものを拡大してゆく。そこには、最初に見た時の印象と、さらによく鑑賞した上で得るものがある。一方、物語（小説）は何ページにもわたって書かれた文を読みながら、その文字から自分の脳裏に、場面や登場人物を創り上げてゆく。絵の中での山賊の顔立ちはたいそう強そうな男であったけれど、小説の中の Shiftlet の容姿<sup>(4)</sup> に関しては大方の一致はあっても、読者はそれぞれ自分の頭の中で描いた像があるはずで、それは人によって少しずつ微妙に違っているはずである。たとえばそれは、男と女でも違うであろうし、年齢によっても違うであろうし、アメリカ人と日本人でも違うであろうし、アメリカ人の中でも、南部の人と東部の人とでも違うであろう。

絵画はひとつの完成された作品である。その作品の中に描かれている場面以外の場面はないし、その中の人物以外の人物はない。もちろん小説も完成された作品ではある。しかし、読者にとってそれは完成されたもので

あると同時に、その文の積み重ねの中に表わされているたくさんの表現に対して、読者自身の解釈を縦横に駆使する自由さをもったものでもあるはずである。それ故に、小説の方が時は遅く流れ、人の心の微妙な変化の推移を丁寧に表現してゆく空間を保有しているのかもしれない。

**Text:** *Flanney O'Connor The Complete Stories*, Farrar, Straus and Giroux, New York, 1971.

\* 引用文末尾の数字はこの text の頁数を表わす。

**Footnotes :**

- (1) 作者はフランス人 Pierre Paul Prud'hon (1758-1823)。この絵の写真は Canaday, J., *Mainstreams of Modern Art*, New York, 1959. より複写したものである。
- (2) A cloud ... shaped like a turnip, had descended over the sun, and another, worse looking, crouched behind the car. (p.156)
- (3) It's nothing so sweet ... as a boy's mother. She taught him his first prayers at her knee, she give him love when no other would ... (p.155)
- (4) His face descended in forehead for more than half its length and ended suddenly with his features just balanced over a jutting steel-trap jaw. (p.146)